

資料1 初稿「1810年の手書き原稿」

11. 兄と妹 **Brüderchen und Schwesterchen**

訳：岡部由紀子

昔々、大きな森の前に住んでいる貧しい木こりがいた。ひどくみじめな暮らしぶり、妻と二人の子どもを養うことさえできなかつた。ある時、パンまでなくなり、ひどく心を痛めていると、夜、寝床で妻がこう言った。「明日の朝早く、二人の子を大きな森へ連れて行き、そこで残ったパンをやって、大きな焚き火を起こしてから姿をくらませて、二人を置き去りにしておいでよ」。男は承知しなかつたが、妻は夫が同意するまで、ずっと責め立てた。

しかし子どもたちは、お母さんが言ったことを、みんな聞いていた。妹ははげしく泣き出したが、兄は静かにするようにと、妹をなぐさめた。それから兄はそっと起き上がり、戸口から外へと出てみると、家の前の白い小石が、月に照らされて光っていた。彼は注意深く小石を拾い集め、ズボンのポケットに入るだけ詰め込んだ。それからまた妹のいる寝床に戻り、眠った。

朝早く、まだお日さまも昇っていないうちに、お父さんとお母さんがやってきて、いっしょに大きな森へ行くのだからと、子どもたちを起こした。両親がそれぞれの子供にパンの小さなかたまりを渡すと、兄のポケットは小石でいっぱいだったので、妹がそれをエプロンの下にしまい込んだ。そして、かれらは大きな森へ向かう道を歩きはじめた。歩いていると、男の子が時々立ち止まっては、家の方をふり返って見るので、お父さんが言った。「足をとめふり返って、何を見ているんだ」。男の子が答えて、「ぼくの白い子猫を見ているんだ。屋根の上に座って、ぼくにさよならって言っているんだもの」。でも、彼はこっそり、あの白い小石をひとつずつ、落としていっていたのだった。お母さんが言った、「とっとと歩くん、あれはおまえの子猫なんかじゃない、煙突にあたっている夜明けの光だよ」。しかし、男の子はそれでもふり返っては、小石を一つずつ落としていった。

そうやって長いこと歩いて、とうとう大きな森（のまん中）に着いた。そこでお父さんが大きな焚き火を起こし、お母さんが「少し寝なさい。あたしたちは森へ行って薪をさがしてくるから。戻ってくるまで、ここで待っているんだよ」と、言った。子どもたちは焚き火のそばに座り、それぞれの小さなパンのかたまりを食べた。二人は夜になるまで長い間待ったが、両親は戻って来なかつた。妹がはげしく泣きだしたので、兄はなぐさめて妹の手を握った。そのとき月が出、小さい小石が輝いて、彼らに道を教えた。兄は一晩中妹を連れて歩きつづけ、朝、家に帰り着いた。お父さんは、気が進まずにしたことだったので、とても喜んだが、お母さんはおもしろくなかつた。

それからすぐにまたパンがなくなり、夜、お母さんがお父さんに森の中へ子どもたちを連れていくようにと言うのを、兄は寝床の中で聞いた。それでまた、妹ははげしく泣き出し、兄は小石を探そうと起きだした。しかし戸口まで来てみると、お母さんが鍵をかけたので扉は閉まっていた。彼は悲しくなってしまう、妹をなぐさめることができなかつた。

かれらは、また夜明け前に起き、それぞれが小さなパンのかたまりをもらった。森への道すがら、男の子がしばしばふり返るので、おとうさんが言った。「おいおまえ、なんで足をとめて、家の方をふり返って見ているんだ」。男の子が答えて、「ああ、屋根の上に止まって、さよならって言っているぼくの小鳩を見てるんだよ」。でも、彼はこっそりパンを砕いて、パンくずを落としていたのだった。

「とっとと歩くんだ。あれはおまえの小鳩なんかじゃない。煙突にあたっている夜明けの光だよ」と、お母さんが言った。でも男の子は、ふり返っては、パンくずをひとつずつ落としていった。

かれらが、大きな森の真ん中までやってくると、お父さんは（また）大きな焚き火を起こし、お母さんはまた、前と同じことを言って、揃って行ってしまった。（兄がパンを道々落として来たので、妹は自分の小さいパンのかたまりの半分を兄に分けた。）夜になるまで待ち、兄は月の光をたよりに、妹をまた連れて帰ろうとした。しかし、小鳥たちがパンくずをきれいに食べてしまっていて、道はみつからなかった。二人は先へ先へと歩いて行き、大きな森の中で迷ってしまった。三日目、二人は小さな家の前にやって来た。その家はパンで作られていて、屋根はケーキで葺かれ、窓は砂糖でできていた。（子どもたちは、それを見て大喜びで）兄は屋根を、妹は窓を食べてみた。二人が立ったまま、ご馳走に与っていると、か細い声が聞こえてきた。

「かりかり、ぼりぼり、パンの耳、誰かな、あたしのおうちをかじるのは」。

子どもたちは、ひどく驚いた。ほどなく、小柄な（年をとった）おばさん eine kleine (alte) Frauが出てきて、子どもたちの手をやさしく取り、家の中へ連れていき、ごちそうを食べさせて、すてきなベッドに寝かせた。

ところが翌朝、彼女は兄を子豚のように、小さな小屋に閉じこめてしまい、妹は、兄に水とごちそうを運ばなければならなかった。彼女は毎日やって来て、兄に指をさしださせ、もうすぐ太るかどうかが調べた。（彼はいつも小さな骨をさし出したので、まだ太っていない、しばらく時間がかかるだろうと、彼女は思いこんだ。妹にはザリガニの甲羅の他には食物を与えなかった、妹は太ってはならなかったからだ。）

四週間たったある夜、彼女が妹にいった。「水を汲みに行っておいで、明日の朝早くお湯を沸かすんだ。一緒に、おまえの兄さんを殺して茹でるんだよ。ついでにパンも焼けるように、あたしはパン生地を用意にとりかかろうかね」。

翌朝、お湯が沸くと、彼女は妹をパン焼き窯の前に呼んで言った。「この板の上におすわり、おまえを焼き窯の中に押しやるから、パンがもうすぐ焼き上がるかどうか見ておいで」。しかし、本当は妹を中に閉じこめて焼いてしまおうと思っていた。それに気がついた妹はこういった。「よくわからないわ。まず、あなたが座ってみて。あたしが押ししてみるから」。おばあさん die Alte が板の上に座ると、妹は板の中へ押し込んで、扉を閉めた。そして魔女 die Hexe は焼けてしまった。

それから妹は兄のところに行き、彼の小屋を開けた。二人は家中が宝石でいっぱいなのを見つけ、全部のポケットにそれをつめ込み、お父さんに持って行ったので、彼はお金持ちになった。お母さんはしかし、死んでしまっていた。

注：（ ）内の文字は、ヤコブ・グリムが、聞き書き原稿に書き加えたメモの部分

グリム兄弟は、1806年から1810年にかけて友人のクレメンス・ブレンターノの依頼により、カッセルの知人の協力を得て昔話を収集しました。これが手書き原稿（初稿）といわれるものです。初稿は出版されず、1812年に出版された「子供と家庭の昔話」の初版、および7版（決定稿）まで改作が繰り返されたグリム童話の礎となりました。

出典：Heinz Rölleke „Die älteste Märchensammlung der Brüder Grimm“ 1975